新潮文庫

剣ヶ崎・白い罌粟

立原正秋著

新潮社

定価は帯またはカバーに表示してあります。

新潮文庫 草95A

昭和四十六年三月二十五日 発行
昭和四十七年一月三十日 二刷

著者 立原正秋

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

㊫ 印刷・株式会社三秀舎　製本・新宿加藤製本所
© Masaaki Tachihara 1971　Printed in Japan

新潮文庫

剣ヶ崎・白い罌粟

立原正秋著

目次

薪能……七
剣ヶ崎……六七
薔薇屋敷……一四七
白い罌粟……二二九
流鏑馬……三二七

解説　白川正芳

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

剣ヶ崎・白い罌粟

薪能（たきぎのう）

一

壬生家には二人の息子がいたが、長男は第二次大戦で戦死し、まだ若い寡婦と一人の娘がのこされた。美しい寡婦はやがてその器量をのぞまれて他家に再婚して去り、残された娘の昌子は父方の祖父の手で育てられた。

分家した次男は兄の戦死にともない壬生家を継ぎ、大戦には生きのこったが、昭和二十一年の春のある夜、鎌倉駅前のマーケット街で、つまらぬことでアメリカ兵と喧嘩をしてピストルで射殺され、三十四年の生涯を閉じた。やはりまだ若く美しい寡婦と一人息子がのこされたが、寡婦はあくる年の春、実家の人達のすすめる人のもとに息子をつれて再婚して去った。

しかし息子の俊太郎は新しい父親になじまず、その年の夏のはじめのある日、学校にでかけたまま帰らなかった。下校帰りに鎌倉の祖父のもとに行き、そのままそこに居ついてしまったのである。

祖父の壬生時信は、これはつまりは自然のなり行きだ、と喜び、孫をひきとって育てることにした。俊太郎を壬生家の跡継ぎにと考えたのである。俊太郎の母が東京世田谷と鎌倉を数度往復して、このことはあっさりきまってしまった。俊太郎九歳、昌子十三歳のとしで、やがて二人は、昌子が二十五歳の秋に和泉公三のもとに嫁すまでの十二年間、寝食をともにした。

壬生家は、日本橋で三代続いた毛織物の輸入商であった。毛織物の輸入ができなくなったのが

昭和十六年頃で、そのまま終戦を迎えたが、輸入商として再起できる見込は当分なかった。以前のように自由貿易ができるようになるまでには十年はかかるだろう、と考えていた矢先に、残された次男をうしなった壬生時信は、間もなく日本橋の店を売りはらい、以来、鎌倉の家をでなくなった。

没落しかけた壬生家にとって俊太郎は唯一の望みだったが、壬生時信は孫の俊太郎が二十一歳の冬、つまり昌子が和泉公三の妻となってから二カ月後に、数々のおもいを残して世を辞した。昭和三十四年のことである。稲村ヶ崎にあった広大な邸と土地はすでに他人の手に渡っており、邸の北側のわずか百坪ばかりの土地と、そこに建っている三十坪の能楽堂が、俊太郎にのこされた。

それから四年の月日がながれた。

二

恒例の鎌倉薪能が今年は九月二十二日に催される、と昌子が知ったのは、八月も末であった。その日の午後、昌子は買物にでた帰りに、若宮大路にある鎌倉彫の源氏堂によった。季節はずれの涼しい日で、街にはどこかもう夏の名残りが感じられる一刻であった。

昌子は源氏堂の店のあがり框に腰かけ、お内儀がいれてくれた上等の煎茶をのんでいたとき、店の壁にはってある薪能のポスターに気づいたのである。源氏堂によったのは、別に用があったわけではない。ときどき何気なしによると茶をもてなされ、何気なしにそこをでるのが、昌子の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

四年ごしの習慣となっていた。正確には、和泉公三の妻となった四年前の秋のある晴れた日から身につけてしまった習慣といってもよい。昌子は茶をひとくちのむと、もういちどポスターを見あげた。場所は例年と同じ大塔宮の鎌倉宮であった。昌子は前の年には独りで薪能をみに行った。その前のとしとその前のとしには、能に興味を示さない夫の公三とでかけた。その前のとしには祖父と従弟の三人ででかけ、それから二カ月後に彼女は和泉家に去り、さらに二カ月後には祖父をうしなってしまったわけであった。

能を観る、という贅沢な習慣が、昌子には身についてしまっていた。稲村ヶ崎にいた頃、売りはらった屋敷内でたったひとつ残された能楽堂で、祖父がたて続けに三番も舞ったのをおぼえていた。祖父は七十九歳で亡くなる直前まで一日に一回は鰻を食べていた。幼い時分から能をみなれ、仕舞をやってきた昌子には、みる目ができていた、と言ってもよい。祖父の舞いが一流能楽師のそれに比肩できるのがいくつかあったと記憶していた。

源氏堂の店内の棚には、ひとつき前にみた能面が同じ位置に三つ並んでおり、ひとつは端正な増女、ひとつは端麗な節木増、そしてもうひとつは華麗な孫次郎だった。昌子は、こうして能面と自らを対置させることで、四年間、能面の作者である従弟の壬生俊太郎と逢ってきた。

「あの面は、七月にここでみたのと同じものかしら」

昌子はお内儀にきいた。

「節木増だけはあのときのままです。あとは売れまして、つい十日ほど前に届いたものですのよ」

お内儀が面を見あげて答えた。するとやはり俊ちゃんは今でも面造りだけで生活しているのだろうか、と昌子はおもった。

「壬生さん、ときたまお見えになるんですが、こう売れなくっちゃ、とこぼしながらも、そのくせ主人がほかのものをすこし彫ってみたら、とすすめても、そのうちに、なんて笑っているんですのよ」

お内儀はわらっていた。

昌子はもう一杯茶をのんでから源氏堂をでた。

それから、おそい午後の陽に桜並木がながい翳をおとしている段かずらの道を駅にむかって歩いていたとき、子供の頃〈見せっこ遊び〉をしたことを想いだした。男の子と女の子がたがいに下半身を裸にして見せあう遊びだった。ときには相手の部分に手でふれてみたりした。手をふれるのはいつも俊太郎で、昌子が俊太郎のものにふれたことはない。子供心にも男のものはなにか兇暴に思えた。

その遊びは人気のない広い邸の一部屋でおこなわれ、庭のすみの繁みのかげでもおこなわれた。公三といっしょになる直前、俊太郎から、見せっこ遊びをしたのを覚えているかい？　ときかれたことがあった。

「俺はいまでも、あの白いふっくりした陶器のようなかたちと、やわらかい感触をおぼえているが、あんなあそびは、いまの子供達のあいだじゃ廃れてしまったろうな」

どうしてまた、こんな子供時分のことなどを想いだしたのだろうか、と昌子は歩きながら考え

る。しかし、想いでというものは、いつもこんな風に唐突にやってくるものかもしれない、いや、俊ちゃんとのあいだが疎遠になるにつれ、想いでだけが鮮明に彩られて残るのかもしれない、と昌子は記憶にとどめている若者の二つの目を想いかえした。壬生俊太郎は父母に似ず醜男にちかい容貌だったが、純一無雑な目をしていた。大学ではサッカアの選手で、帰宅すると能面を打っていたが、彼はなんにつけても明確なもの、単純なものが好きな青年であった。あの大戦直後の荒涼とした時代に、わずか九歳で能面造りに興味をもった少年の存在は、ながく昌子のなかでゆるがぬ位置をしめていた。こんな太平な時代に、あのような一人の青年が生きているのは、稀有なことかもしれない、といまも昌子は歩きながら考えている。

壬生俊太郎がサッカアに見出したものは掟と節度と勇気であった。そのなかで筋肉が躍動し、汗をながして勝敗をきめる、その緊張の度合、それが彼のすべてであった。そんな彼がいまだに面打ちに興味をもち続けているのはどうしたわけか、と昌子は和泉公三との婚約がととのったときに従弟にきいたことがある。昌子の考えでは、サッカアと面打ちではおよそ対蹠的な行為だったのである。俊太郎はわらって答えなかったが、彼はあるいは、祖父の能楽堂にかかっている古い能面から、他家に去った母親の面影を見出していたかもしれない。母のもとをでた彼は再び祖父の家をでなかったのである。

昌子は公三といっしょになってから間もなく、やはり従弟とは離れられないのではないか、と思った。これはどこかで予期していたことであったにしろ、それからの夫との毎日が虚しさに充ちはじめたのは予期していなかったことであった。見合結婚をした夫に不満のあろうはずはなか

ったが、夜、夫にからだをまかせながらも、能楽堂をおもいうかべ、そこで面を打っている醜男を想った。

祖父の告別式のとき、彼女は従弟をつかまえ、あたしに子供ができるまで俊ちゃん他の女と結婚しないで、と約束させた。日はすぎて行き、昌子のなかで虚しさは深まって行った。そして四年たったいま、その虚しさは、彼女の肉感と同じように熱っぽいものになっていた。四年すぎたいまでも昌子に子供はできなかった。ことしの春いらい、昌子は、従弟を訪ねようと思いたったことがいくどかあった。いちどなどは途中まで行き引きかえしてきた。思いとどまったのは、人妻としての貞節からではなく、いとこ同士という血の近さを意識したからであった。

昌子は九月二十二日を今年も心ひそかに期待したが、結局その日がきてみると、どうしたわけか薪能をみにはでかけなかった。あとから考えてみて、でかけなかったわけが自分なりに判った。公三に嫁してからは薪能の催し場でいちども従弟を見かけなかったからである。牽牛と織女のはなしは遠いはなしではなかった。

「ことしは、薪能をみにでかけなかったのかい？」

と夫から言われたのは、十月にはいってからだった。日曜日の午後、つれだって街にでて、六地蔵通りの掲示板にはってある薪能のポスターを公三が見つけたときである。

「ええ、ことしはやめましたの」

昌子はしとやかに答えた。答えてしまってから、そうとは知らない夫にいたわられたことが、すこしばかり呵責となって残った。

そしてこの年はこともなく過ぎて行ったが、この二十九歳になる人妻の心のなかでは、暗い夜を彩る薪能のあかりが燃えつづけていた。

鎌倉薪能は、昌子が公三といっしょになった年から市の催しもののひとつに加えられ、それ以前にはなかった。しかし昌子が薪能をみたのはもっと早く、祖父と従弟の三人で大和路をめぐった年の春、奈良の興福寺南大門で、金春宗家の差配するそれに接したのがはじまりであった。昌子十八歳のとしである。しかし従弟に永遠をみたのはそれより以前であった。

三

四月の中旬、目黒の能楽堂に卒都婆小町をみにでかけたのは、昌子としたら習慣のひとつにすぎなかった。「能を観るとか仕舞をやるとかは、女がわが身につける贅沢のひとつである。そのようにして身につけたものを見世物にしたり、あるいはそれで暮しをたてようとしてはならない」と昌子は生前の祖父からきかされていた。祖父がこう言ったのは、祖父が女能楽師を嫌っていたからであった。女がでると舞台の厳格さがくずれる、と祖父は言っていた。たいそうな目ざわりだ、とも言っていた。しかし昌子にはそんなことはどうでもよかった。女がわが身につける贅沢のひとつ、と心得ることで彼女はこれまで身を処してきた。事実、仕舞をやりながらも、春秋の別会にでたことはいちどもなかった。

その目黒の能楽堂で従弟にであったのが偶然なのか必然なのか、昌子には判らなかった。従弟が目黒の能楽堂にでかけているのは昌子も知っていたが、不思議と二人は同じ日にでかけたこと

がなかった。

「久しぶりで逢ったんだから、あとで、めしをおごってくれ。俺はいま文なしなんだ」

と俊太郎は言った。こうした従弟をみるのは楽しかった。

二人は最後の舞台をみずに七時に能楽堂からでた。東横線で横浜にでると、南京街に行った。夫の公三は、大学の慰労会だと称し、泊りがけで熱海にでかけていた。二人は支那料理をとってつもる話をした。

同じ鎌倉に棲みながら、二人が祖父の告別式の日いらいいちども顔をあわせていないのを、他人がきいたら不思議と思うかもしれない。二人に、愛しあっている者同士の節度があったのは事実だが、たがいに逢うのを避けていた、ということはなかった。

「まだ子供はできないのかい」

俊太郎は驚くほどの速度でビールを飲み料理をたいらげながら、合間にきいた。

「俊ちゃん、結婚する相手のひとがみつかったの？」

「いや、そういうことではないが」

「あいまいな返事ね。……子供はできないのよ」

「できないようにしている、というわけではないんだろう？」

「あなた、あたしがあかくなるようなことを平気でいうのね。すこし不良になったようね。公三には子種がないの。子供の頃、頬張風邪をやり、それで子種ができなくなったんですって。その風邪にかかると、千人に一人はそういう人ができるそうよ。それがわかったのは一昨年のことだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com